

# グリーンサークル26号

クローズアップ 祐乗坊進  
活動団体クローズアップ 多摩中央公園/よこやまの道班  
多摩市みどりのかわら版 池田重丸



タチツボスミレ

～クローズアップ～

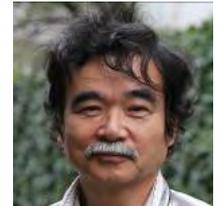
## 里山の縁側づくりのススメ ～みどりで人と人を繋げ、まちを元気にする～ 一本杉炭やき倶楽部 代表 祐乗坊 進

子どもの頃、我が家の縁側には近所の遊び仲間がいつも集まっていた。友達の家を訪ねるときも、台所や玄関からではなく庭の縁側から声をかける。縁側というと農家の情景が思い浮かぶかもしれないが、住宅地でも縁側は内と外を柔らかく繋ぐ場であった。「まち育て」を全国で実践している建築家の延藤安弘氏は、この縁側が担ってきた役割に注目し「まちの縁側」づくりを提唱している。その趣旨を活かし、多摩ニュータウンの里山にも、そのような「縁側」があったら地域がもっと元気になれるのではないかな。そんな思いから一本杉公園の炭焼きの窯場で「里山の縁側」づくりを実践している。

そのはじめの一步は「声かけ」である。窯場近くを散歩している人や立ち止まり活動の様子をうかがう人に声をかけ、窯場に誘い入れる。週末は窯場付近を訪れる人が多い。炭や炭焼きの説明から始まり、お互いの会話が広がってゆく。故郷で子どもの頃に見た炭焼きの風景のこと、身近な場所で炭焼きが行われていることへの思いなど、会話の内容は様々だ。休憩時間であれば一緒にお茶を飲み、のんびり寛いでいく人もいる。持ち合わせの野点の道具でお茶を振る舞ってくれた人もいた。会話を楽しんだ人には炭のおみやげも忘れない。会話をきっかけに会員になってしまった人もいる。

声かけにはホスピタリティも必要なので得手不得手はあるかもしれないが、人をもてなす気持ちがあれば心は通じる。何もなければ出会う機会がない見知らぬ同士だけ

ども、炭焼き活動が目前を通り行く人との交流のきっかけを作り、新しい縁（繋がり）を生み出す。これが誰でも始められる「里山の縁側」づくりだ。延藤安弘氏は「人が生きる豊かさの原点は他者との関わりの中にある。内と外との繋がり、相互の縁が繋がっていくことが元気をかき立てる。」と縁側の役割を説いている。その通りだと思う。



祐乗坊 進氏

グリーンボランティアなど市民活動としてみどりの維持管理を行っている人たちは、自分たちの活動している姿が通りすがりの人たちの目にどのように映っているのか考えたことがあるだろうか。どうしても作業をすることが中心になり、そんなことは考える余裕がないという人も多いかもしれないが、グリーンボランティアの活動を横目で見ながら通りすぎる人たちに声かけをし、活動の紹介などを話の種に会話をすれば、予期しない新しい縁が必ず生まれるはずである。その縁は、みどりへの関心を深める人や活動への理解や応援してくれる人を増やし、自分たちの活動を元気にする可能性も秘めている。

市民活動から派生する「縁側」は活動の時にだけ生まれる一時的な場だが、窯場近くには既に縁側的な役割を担える旧加藤家（古民家）がある。ここを茶店にすれば公園としての魅力度もアップするかもしれない。こういう既存施設を活用し「里山の縁側」づくりが展開できれば理想的である。一方、多摩中央公園のグリーンライブセンターはすでにその機能を発揮している。ここは当初の基本計画作成からオープニングイベント、行事運営などをお手伝いさせて頂いた思い入れのある施設なので、「里山の縁側」としての機能をさらに充実させ、市民のみどり文化の拠点として成熟していった欲しい。

### 一本杉炭やき倶楽部

『炭と炭やきで人と緑と地域をつなぐ』ことを活動の原点として、多摩市一本杉公園内で炭焼き活動を行っている。  
ホームページ 「一本杉炭やき倶楽部」で検索



窯場の縁側の風景

～活動団体クローズアップ～ 「タケノコと遊ぼう」講座  
多摩中央公園班 班長 上田 誠

多摩中央公園班では、多摩中央公園の西から南の遊歩道に沿った竹林と雑木林で、活動しています。

竹林地区は、美しい竹林を保つため密集竹や古竹を整備し、伐採した竹を使って竹垣や腐葉土のピット作りに利用しています。雑木林地区では、希少植物を保護し、子ども達が安心して遊べる林をめざしています。

春になると当班の活動地区内の竹林のあちこちからタケノコが、頭を出し始めます。

毎年4月に「タケノコと遊ぼう」を市民の子どもと保護者を対象に約50人募集し、①やさしい竹の勉強と②実際にタケノコを親子で掘り、観察をする講座を開催しています。

我々、多摩中央公園班のメンバーは、どのあたりが採りやすいか、多く出ているかを事前に調べ、当日は、土に埋まっているタケノコの生態を説明しながら掘り方を教えています。やさしい竹の勉強では、30分ほど竹とはどういうものかを講義して、より竹が身近に感じられるような内容となっています。

内容は以下のようなことです。

- ① 講義内容
  - ・多摩中央公園内の主な竹について
  - ・真竹と孟宗竹の見分け方について
  - ・地下茎の特徴
  - ・竹の花について
  - ・竹の病気について

② タケノコ観察

中央公園班の活動場所である竹林地区や中2、中3地区で行います。大体毎年100本以上が頭を出して、参加者は講義で聞いた内容をもとに、移植ゴテを使って優しくタケノコを根元まで掘り観察します。

さらに掘り進めタケノコを掘り起こすには、地下茎を切ることで、根元近くの紫のイボイボ（根っこの赤



参加者集合写真

ちゃん)が見えるまで掘ることが大切です。

普段、竹の観察の機会がなかなかないこともあり、子どもも大人も興味を持ち観察をしている様子が印象的です。

多摩中央公園班のメンバーはこのように教えながら掘り起こしを支援したり、危険な場所に行ったり、危ない行為をしてないかどうか見守りも同時に行います。

講座は約1時間で終わりますが、子ども達が、大きなタケノコをかざしながら喜んでいる様子や、重くて持ちきれないなどと言いながら、がんばって担いでいるご家族を見ていると我々班員も“今年も楽しんでもらえて良かったな。来年もたくさんタケノコが、出ると良いなあ”という気持ちになります。

ただ出過ぎて採りきれなく放っておいて2週間もすると見事な竹に成長し、竹林地区の整備がまた大変になり、痛し痒しといった気持ちでもあります。

それでも市民の方とのふれあいのため、この講座がいつまでも続けられたら良いなと感じています。

講座に関するお問い合わせ

多摩市立グリーンライブセンター 電話 042-375-8716



竹の生態を学ぶ



竹林見学



実際にタケノコ観察

～活動団体クローズアップ～ **春の訪れ（よこやまの道の野鳥、昆虫や植物）**  
よこやまの道班 表 良子

立春を過ぎて春一番が吹く頃から鳥たちの囀りに変化が現れる。毎年この時期、慌ただしく巣箱のメンテナンスが行われる。取り外し中をのぞいて営巣が有るのか、埒(ねぐら)にされたのか、全く使われた形跡がないかをチェックし掃除をする。諏訪ヶ岳に掛けてある13個の巣箱のうち、2017年に営巣が確認できたのは3個であった。2015年は最も多い営巣であったが、2016年、2017年は少し少ない。

前回の巣箱を作ってからもう4～5年程経ち屋根が剥がれるなど老朽化したため、2017年は数名が活動日の午後に残って新しい巣箱を作った。この日はその新築した巣箱掛けだ。正面を北東方向に向ける。巣箱同士の距離も一定以上間隔を開ける。シジュウカラのために巣の入り口は直径2.8cm。蝶番をつけて開け閉めができるように工夫してある。四隅に穴を空け排水口も装備で風通しが良く、縦横のサイズのバランスも良い。至れり尽くせりの巣箱は池田班長の設計だ。一度ヤマガラが中を覗いているのを見かけたが、残念ながら、鳥たちが巣箱を出入りする所は確認できていない。意外と敏感で、見られていると思ったら寄り付かないようだ。諏訪ヶ岳の北と南では風の通り方も、人々の視線も異なる。鳥にとって巣を作りたいと思う場所はあるのか、毎年試行錯誤が続いている。



巣箱掛け

啓蟄の頃から本格的な春に向けてカウントダウンが始まる。もみじの広場は夏には雑草が繁茂する草地だ。フェーブルも自宅の庭をアルマス(荒地)と呼んで植物と虫に囲まれた生活をした。もみじの広場はそんな草地を彷彿とさせる虫たちの楽園だ。まだ春浅い草地では枯れた草の下で昆虫や植物たちはじっと時を待つ。晴れたある日の午

**よこやまの道班**

活動日時 第2、第4土曜日 9:00～12:00  
集合場所 エコプラザ多摩（多摩市諏訪6-3-2）  
ホームページ 「よこやまの道班」で検索

後、ゆっくりと訪れた春に冬の間、成虫で過ごしたキタテハが、暖かな春の陽ざしを浴びて日光浴をしていた。春先の優しい陽の光は虫たちに多くの恵みを与えてくれる。ドウダンツツジの垣根では産み付けられたカマキリの巣が後ひと月ほどの時を待っている。



キタテハ

ご神木のヤマザクラが咲く頃になると、もみじの広場の草地に紫紺色のノジスミレが顔をだす。「葉柄に翼が目立たないのがノジスミレ」と「よこやまの道班」に入りたての頃先輩の方々に教えて頂いた。スミレの判別は難しい。植物に詳しい方はルーペを持って毛の有るとか無いとかで区別しているようだ。散策に訪れる人々は道の横に秘かに咲くノジスミレに気が付かず通り過ぎて行ってしまう。その昔、ウィリアム・ワーズワースが「ルーシー」という詩を書いた。「人目につかない 苔の生えた石のそばのスミレ花 星のように美しく たった一つ空に輝く。」人に知られずに生きた女性の姿をスミレに重ねた悲しい詩だ。ノジスミレは香りも良いようだから、今年はその香りを確かめたい。そのノジスミレの花が咲き終わる頃、長かった冬の記憶もようやく遠くに過ぎ去り、この後春は一気に加速する。春の妖精のようなキンランやギンランが主役に躍り出て、あちこちでジュウニヒトエのくすぶった淡い藤色の花が咲く。こうして諏訪ヶ岳は春爛漫の季節を迎える。



ノジスミレ

## 多摩市みどりのかわら版

## みどりの拠点づくりに向けて

公園緑地課 池田 重丸

この度は“グリーンボランティア通信グリーンサークル”に掲載の機会を頂きありがとうございます。

このような機会に恐縮ですが、私を知らない方が大半だと思いますので、自己紹介を兼ねて私の仕事等を勝手ながら紹介させていただきます。

私の仕事の一つに緑化推進があります。グリーンライブセンター（以下 GLC）で開催している花壇講習会は 29 年度で 5 年目となり、お花がいつも綺麗なガーデンや温室が見える GLC のホールで行う講習会は好評で、内容についても意見や要望を踏まえ、試行錯誤しています。

また、昨年度より公園内で花壇活動をしているボランティアの皆様に、より花に詳しく、花を好きになってもらえるよう、鶴牧西公園で花壇講習会を開始しました。その講習会も 1 年が経過し、課題解決に向けたフォローアップや、参加したくなる仕組み作りに取り組んでいるところです。

そして管理担当の大事な仕事といえば樹木の剪定や伐採要望への対応ですが、私はスギの花粉症（今年で 22 年目！）であるため、春の現場は非常に苦手です。大学時代に「森林を管理するとしたらスギを全て切ってやる！」な

んで冗談を言ったのを最近よく思い出します。実際に管理をしてみると、予算がいくらあっても足りません！しかし、この仕事をするまで管理経費がこれほどとは知りませんでしたし、市民の方々にも知られてないと感じます。

多摩市は 1 人当たりの公園面積が都内でもトップクラスであることは、喜ばしいことですが、裏を返せば、他市に比べ 1 人が支えている公園面積が多いこととなります。管理に対する多くのご指摘を頂くと共に、計画的な管理が求められていますが、費用面での難しさを日々感じています。

このような状況の中、皆様方の管理へのご協力につきましては非常に感謝しております。

しかし、ボランティア活動や公園管理を取り巻く状況等、知られていないことが多いのが現状です。先程の緑化推進に取り組んで頂いているボランティアの皆様の活動情報も同様ですが、市民の方々にもっと理解してもらえよう、こうした情報を発信していく必要を強く感じており、今年こそは！と思っているところです。

今後もより良い公園、緑地の管理のためご協力をよろしくお願いいたします！



鶴牧西公園での講習会風景



鶴牧西公園の花壇



鶴牧東公園のガリバー山に登る息子

## 表紙の絵

## 「タチツボスミレ」（スミレ科）

絵・内城 葉子

淡い紫色で葉はハート型、身近で一番よくみられるスミレです。

北海道から琉球列島まで広く分布します。

<プロフィール> 1949年東京生まれ。1986年国立科学博物館第2回植物画コンクール文部大臣奨励賞、1989年世界らん展ボタニカルアート部門ブルーリボン賞、英国王立園芸協会ロンドン・フラワーショーGold Medal 受賞など

<所属>日本ボタニカルアート協会、日本植物画倶楽部、どんぐり山を守る会代表

<著書>「鏡の中・俳句と植物画」共著、2005年新風舎。他、絵本や学習図鑑などに描画。雑木林などの活動を通じ、実際の木々や草花に触れることが詳細に及ぶ精密な描写となり、植物本来の温もりを感じられる作品が特徴。

## 編集後記

春は“初”という言葉が似合う季節ですね。先日、ツリークライミングを初体験しました。上ると多摩ニュータウンを眺めることができました。今回登ったコナラの木は推定 60 歳。多摩ニュータウンの街の変化を見てきたのだろうな…なんて思いつつ、みどりに寄り添う気持ちを忘れない様にしたいと思いました。（高澤 愛）

多摩市グリーンボランティア通信 グリーンサークル 26 号

発行日：2017年4月1日

編集・発行責任：多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局

〒206-0033 東京都多摩市落合2-35 多摩中央公園

多摩市立グリーンライブセンター内

電話 042-375-8716 FAX 042-375-0087

ホームページ <http://www.keisen.ac.jp/tgic/>